

# 「金沢大学総合技術部 EXPO ライブイベント」参加報告

桐 昭弘, 京極 真由美, 丸山 博, 皆川 沙月

## 1. 概要

金沢大学総合技術部主催「総合技術部 EXPO」において、研究推進技術本部における技術相談・技術支援の取組を学外に発信するとともに、他大学における技術職員組織の活動や支援体制に関する情報収集を行い、本学における技術支援体制の高度化に資することを目的として参加した。

また、学外技術職員組織との交流の中で本学の取組を共有するとともに、今後の技術支援ネットワーク形成の契機になればと考える。

名 称：金沢大学総合技術部 EXPO(ライブイベント)

日 時：令和8年3月12日(木) 11:00~16:00

場 所：金沢大学 角間キャンパス 自然科学本館

主 催：金沢大学 総合技術部

参加者：桐 昭弘, 京極 真由美, 丸山 博, 皆川 沙月 (4名)

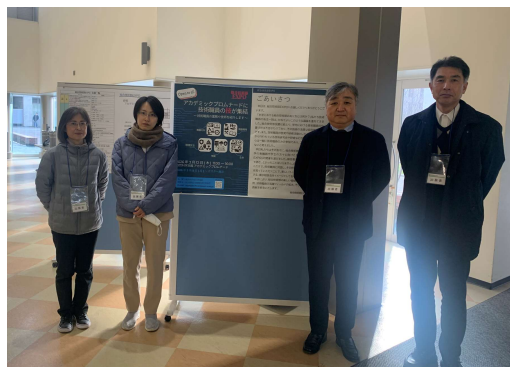


図1 参加者集合写真

(自然科学本館アカデミックプロムナード)

## 2. 展示内容

本展示は高エネルギー加速器研究機構 技術職員シンポジウムにおいて発表した「技術相談・技術支援の取組み」ならびに Toyama Academic GALA 2025 にて展示の技術支援グループの取組として技術スキルデータベースの紹介を行い、研究支援における技術職員の役割について来場者への説明を行った。

本イベントは金沢大学総合技術部が主催し、技術職員の活動を広く学内外に発信することを目的として開催されたものであり、自然科学本館(アカデミックプロムナード)に3月9日(月)から12日(木)まで常設展示がされ、12日(木)ライブイベントとして、当日は各部門による技術紹介パネルの展示に加え、セミナーやワークショップなどが実施され、技術職員の活動を紹介する場となっていた。図2に示す本学によるパネル展示についても、金沢大学ならびに他大学の技術職員をはじめ、教職員等から質問や意見交換があり、技術支援の取組みやスキルデータベースの考え方について情報交換を行うことができた。



図2 本学によるパネル展示

### 3. 所感

金沢大学総合技術部の展示では、各部門が主体的に技術支援を推進している様子が非常に印象的であった。特に個々の技術職員のスキルに依るだけではなく、部門として技術支援を整理し、組織的なサービスとして展開している点に特徴があると感じた。

例えば、生命部門による「組織標本作成の受託サービス」や、情報部門による「産学連携を想定したクラウドストレージサービスの提供」など、研究支援を組織的な枠組みとして整備し運用している事例が紹介されていた。これらは、技術職員の専門性を組織の機能として位置づけ、研究活動を支える仕組みとして展開しているものと理解した。

本学においても技術相談・技術支援の取組みを進めているが、今後は個々の技術支援の積み重ねにとどまらず、技術職員の専門性を技術本部としてどのように整理し、研究支援機能として展開していくかという視点での検討が重要であると感じた。また、今回の取組みは、技術職員の活動を学内外に可視化し、研究支援組織としての役割を社会に示すという点でも示唆に富むものであった。今後、技術本部においても技術相談・技術支援の取組みを組織的に整理し、その機能をより広く発信していくことが求められるものと考ええる。

(桐 昭弘)

北陸先端科学技術大学院大学による「北陸地区でのヘリウムリサイクルの繋がりを構築する取り組み」の展示について発表者と意見交換を行うことができた。ヘリウムリサイクルの試験運用において本学も関わりがあることを初めて知り、地域での連携の広がりを感じた。また、ヘリウムリサイクルの現状や技術的な取り組み、さらにヘリウムの流通に関する情報収集を行うことができ、大変有意義な機会となった。

(京極 真由美)

富山大学の技術支援の取組みを報告するとともに、展示内容を通じて金沢大学との比較を行い、今後の富山大学技術本部が目指すべき方向性を探った。EXPOの展示会場は教職員や学生の往来が盛んな建物内の通路沿いに設置され、学内へ広くアピールできる環境であった。発表内容はポスター展示に留まらず、セミナーやワークショップなど多岐にわたり、技術職員の熱意が感じられた。

両大学の技術職員数に大きな差はないものの、設立時期の違いによる経験値の差が大きいのかもしれない。しかし、工夫次第で富山大学でもさらに多様な取組みを展開できる可能性を再確認した。

(丸山 博)

医学系教育研究支援センターによるポスター展示を拝見した。受託サービスは本学と比較して幅広く提供されており、研究時間が限られる医学系研究者の利用ニーズに対応した支援体制が整備されている印象を受けた。本学においても、多忙な研究者の研究活動を支援する観点から、利用料金の設定については検討が必要であるものの、需要が見込まれる分野については受託サービスの導入を検討する必要があると感じた。

また、当日は技術職員による図3に示す3Dペン体験のワークショップも実施されており、技術職員の活動や技術支援の取組みを広く紹介する機会として意義があるものと感じた。

(皆川 沙月)



図3 ワークショップ「体験3Dペン」



図4 展示全景(自然科学本館アカデミックプロムナード)

#### 4. まとめ

今回の参加を通じて、他大学における技術職員組織の活動発信の取組みを確認するとともに、本学の技術支援の取組みについても紹介する機会となった。図4に展示全景写真（自然科学本館アカデミックプロムナード）を示す。今後は、このような大学間の交流を契機として技術職員組織のネットワーク形成を進めるとともに、本学が開催する Toyama Academic GALA などの機会においても、他大学の技術職員の取組を紹介いただくなど、相互の活動発信の場として発展させていくことも有意義であると考えている。